

母のディスクール／娘のディスクール：
Sulaにおける欠如としての「近代」空間、時間

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和泉, 邦子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/997

母のディスクール／娘のディスクール

--*Sula*における欠如としての「近代」空間、時間

和 泉 邦 子

すなわち、母権の復活を志向する数多くの宗教が<女>に帰属させる空間、... 神より以前の、したがって形而上学と矛盾することになる、あのはぐくみ育てる、**名づけられない子宮空間**によって、つまり **コーラ** という **アポリア** によって示したその空間の問題性に。¹

モリソン文学に登場する女たちは、クリステヴァが「女の時間」と呼んだものをいつも作動させているように思える。それは、「再生産、種の存続、生死、身体、性、象徴」に突き動かされて、「生産」価値に異議を唱えるような生存配置である。²

(太字・下線部筆者。イタリックス原文。以下、本文及び注の太字・下線部は筆者)

Toni Morrisonの第二作*Sula*は、1919年から1965年のタイムスパンにまたがる‘chronological order’を物語の外枠として配して、二つの大戦に挟まれて到来したハーレムルネサンス期から公民権運動のピーク時で終わる時代背景をカバーしている。1940年から1941年の一年間を四季で章立てながら、ペコーラの父親と母親が育つ「北部移住」の時代背景に問題の根拠を遡って扱っている第一作*The Bluest Eye*、1931年生まれのミルクマンが1960年代の公民権運動のピーク時に青年期を迎えるまでを描いた第三作の*Song of Solomon*とともに、初期の三作品は、資本主義経済システムに本格的に取り込まれていく歴史変容プロセスの黒人コミュニティにとっての意味、「近代」への黒人の位置を全体として問いなおしているといつてよいであろう。*Sula*の始まりは、第一次世界大戦を契機に、資本主義経済システムがこれまで排除していた黒人労働力を必要とさせる「緊急事態」を発生させ、奴隷制廃止後も人種差別が厳しく存続していた南部の農村から、北部の諸都市に大量の黒人たち

を賃金労働者として「大移住」させる歴史変容の出発点であって、北部が黒人たちにとって「近代」的生活形態を保障するユートピアにみえた時点である。³戦争とその後の好景気によって、歴史の流れが大きく「近代化」に向かって突き進んでいき、「近代」の合理化、便利さ、豊かさ、発展、開発の論理が、全てを一元的価値観へと収斂させていく時代背景は、一方で、黒人ブルジョアジー層を出現させるが、他方で、大恐慌とともにディストピアへと反転させる契機をもはらんでいて、黒人たちにとっての本格的「近代」参入の歴史は、資本主義の経済論理が「白人／黒人」の図式に必ずしも還元されない、より複雑で巧妙な形で人種差別を隠蔽していく喪失体験としてモリソンの作品に刻まれることになる。

*Sula*の章立ての形式として配置されている‘chronological order’が、西欧「近代」の進歩という大きな物語とその「近代」物語が体現する科学的合理主義、普遍的理性、経済的有効性の時間意識に飲み込まれざるを得ない場所として、外枠物語としての「線的時間性」を示しているとするれば、オハイオ州メダリオン町の一角の「ボトム」と呼ばれた黒人コミュニティの盛衰とその時空間に生じた出来事や人々の生き様を織り込んだ内枠物語は、そのような合理性によって説明のつかないように見える殺害(エヴァのプラム殺し、スーラのチキン・リトル殺し)やたくさんの無駄死(コミュニティ自体の崩壊)に満ち溢れている。Barbara Hill Rigneyは、「*Sula*の物語は、そのタイトルの名付けにもかかわらず、厳密に言えば、スーラが主人公なのではなく、彼女は黒人アイデンティティという小説の焦点をネル、シャドラック、ネルの母親、エヴァ、コミュニティ自体と分け合っている」⁴と述べたが、とするれば、内枠物語に出没する奇妙な出来事や人物と外枠の「近代」物語とは、どのように関連するのであろうか。*Sula*の物語は「黒人であり女である」スーラが「人種・ジェンダー・階級」の既成の概念への抵抗点として限界に挑戦し、強い意志を持って「自分を創り出す」という「黒人女性版」のBildungsromanの試みの物語を中心とるように見えながら、一人のヒロインの物語である以上に黒人コミュニティが集団としてどのように再生するかという物語であり、スーラが達成し損なう「個」の概念自体が問い直される場に向かって開かれていく。言い換えれば、ヒロインの生涯を「成長」という線的時間性に沿って個人主義的に枠付けていく試み自体が、「個」へと閉じていく西欧的物語形式のアポリアであることを問いなおす仕掛けによって、*Sula*の物語はアイデンティティという概念自体を脱中心化すると同時に、西欧的な言語秩序、思考の枠組み、物語形式が前提とする空間性、時間性が脱構築されて

いく「近代」への批判的パースペクティブの場が暗示されていく。

モリソンの小説においてその批判的パースペクティブの焦点にあるのは、「女性主体形成」の問題を書き換えようとしたフェミニズム的な声が、娘の声を優先するあまり「母の声」を再度抑圧することになった母親物語の場所であると思われる。⁵ *Sula*をめぐるこれまでの批評の中には、スーラが達成し損なうものを「スーラ／ネル」に括り直すことで、「レズビアン的読み」⁶や「女性どうしの友情」⁷を間主観的(intersubjective)に、或いは、内主観的(intrasubjective)⁸に補い合う読みをして「精神分析的読み」の傾向を強めていくものもあるが、⁹「自己を創る」欲望を共有する「スーラ／ネル」の娘の世代の声が究極的に問うている対立軸とは、犠牲を強いられる母親性を回避しようとする娘の物語において、被抑圧民族を再生産する(生き延びさせる)集団的責務を負ってきた(娘の世代から忘れ去られてしまった)母の世代との相入れない価値観なのであろう。クリステヴァは『女の時間』で、「企て、目的論、線的予見的展開としての時間であり、出発、進行、到着の時間、要するに歴史の時間性が西欧文明の論理的で存在論的な価値に固有なもの」として近代西欧のディスクールを線的時間性で示し、そのような時間性の対極として、「名づけられない子宮空間によって、つまりコーラというアポリアによって示したその空間」として問題化した。¹⁰「近代」の線的時間性に対する、「対抗的な」女の時空間がはらむ問題性はモリソン文学においてどの程度、引き継がれつつ、書き直されているといえるのであろうか。‘individuation’という社会化の「成長」プロセスを「必然的」「進歩的」「発展的」とみなす線的時間性において、踏みつけにして乗り越えられて行くべき場所、唾棄されてアブジェクトされる場所として位置づけられてしまう「母なる空間」の問題がどのように書き換えられているのか考察していきたい。その際に、(1-a) 西欧近代物語としての外枠物語--「進歩、発展」の線的時間概念とシャドトラックの狂気の場所、(1-b) 黒人版レディ物語--(W)right家の正しい「近代」の母の位置、核家族的空間、時間、(1-c)「エヴァーハナ-スーラ」の三代にわたるピース家の女たち--問い直される「別の」家族空間、(2-a) シャドトラックとスーラ--二人の悪魔の場所とコミュニティの崩壊の場所、(2-b) 線的時間と円環時間--「自己／他者」の未分化空間としての母なる空間、の順に分析を試みる。

(1-a) 西欧近代物語としての外枠物語--「進歩、発展」の線的時間概念とシャドトラックの狂気の場所

*Sula*は、西欧的線的時間概念からは「進歩」と名指される外枠物語が1919年から1965年のタイムスパンにわたる‘chronological order’で配置されながら、そのモダン化物語のディスクールに根本的に内挿された矛盾を露呈する空間が示されている。物語の冒頭部分で、モリソンは、奴隷制廃止後、黒人たちに与えられたように見えた自由への約束の旅が、「町が大きくなり、農場が村に変わり、村が町になり、進歩のおかげでメダリオンの道路がタイヤの摩擦で熱し、ほこりっぽくなったあとでは、‘After the town grew and the farm land turned into a village into a town and the streets of Medallion were hot and dusty with progress’」¹¹と表層的には呼びながら、合理性、理性、物質的豊かさに向かって一直線に進む進歩物語から、矛盾、狂気、不合理、病理、貧困、として排除されていく内枠物語を対置させる。「天の最低部」と白人の嘘によって名指された「丘の上の約束の土地」に現出したユートピアから、近代啓蒙の大きな物語から見れば取るに足りない黒人コミュニティの瓦解の物語、顧みられることもないたくさんの死が瓦礫の山を積み上げるように排出されていく。

白人の主人からボトムと名づけられた空間に作り上げられた黒人コミュニティは シャドラックが中心人物となっている二つの章--“1919”が第一次世界大戦の終末を示し、“1941”が第二次世界大戦の始まりを示す--によって枠付けられており、黒人兵士Shadrackの従軍体験にまつわるエピソードは二つの大戦に挟まれた時間性とその時間性への参入のプロセスで変容を遂げた黒人コミュニティの歴史認識がはらんだ問題性を投げかけている。第一次世界大戦は、アメリカ国内で奴隷制とその余波に苦しむ多くの黒人たちに、戦地（外側）では「男性性」を証明する機会を、内側では南部社会を逃れてユートピアを実現する約束の地（北部都市）への「大移動」の機会を提供した。戦争という外的要因によって生じた賃金労働者としての雇用の増大は、黒人コミュニティが近代資本主義システムへと参入する歴史変容を「人種的向上」への絶好の機会の到来として把握されるからである。しかしながら、モリソンは、「進歩」と名指される線的時間性への参入の契機を、第一次大戦中、フランスの前線に赴いた黒人兵士の「脳からの命令が来なくなったので、頭のない兵士のからだはがんこに走りつづけた‘taking no direction from the brain, the body of the headless soldier ran on’ (14,17)」様子を見る行為に象徴される方向感覚喪失の物語として書き込み、黒人コミュニティにとって適切な歴史認識は、白人中産階級男性の一元的価値観に同化して、自ら白人化・ブルジョア化することなのかと問い直す。戦地（外部）において「敵に

向かって走っているのか、敵から逃げ出しているのか(13)」わからなくなる方向性喪失のエピソードは、エピローグのような最終章“1965”が示唆している歴史的含意（合衆国がベトナムへの北爆を開始し、南カリフォルニアの「人種戦争」としてよく知られているワッツ暴動の年）¹²とも呼応して、「内側＝味方＝合理／外側＝敵＝暴力」として西欧形而上学的に二項対立に区分する図式が「人種」というカテゴリーにおいて解体される場を象徴的に織り込んでいるともいえる。ベトナム戦争の悪夢が「味方／敵」を仕切る境界を見失ったときにアメリカ国家が目的を喪失して悪化の一途を辿ったこと、外部の敵と戦ったはずの黒人兵士を待ち受けていたものはアメリカ内部の人種差別であったという現実、近代国家の枠組み自体がいかに「想像の共同体」¹³として「内側／外側」を恣意的に定める境界なのかを露呈させる。近代民主的国家アメリカの「進歩」の外枠物語が内側にはらんでいた「嘘」は人種のカテゴリーにおいて転覆的なジェスチャーとして噴出する。

「境界」を定めて秩序づける「正常」な感覚を失った帰還後のシャドラックは、最初は「狂気」として精神病隔離病棟に、次には「浮浪と酩酊」として監獄に監禁されるが、かれの方向性喪失を取り戻す可能性は、「狂気」の場所を見定めるジェスチャーに暗示されていく。そもそも、近代啓蒙の線的時間物語は、戦争と暴力を西欧の進歩という大きな物語に勃発した天災のような「異常な偶発時」と括ることで「進歩」の歴史性の例外の位置に置く。しかしながら、近代が「正気、健康、善／狂気、病気、悪」と名指して後者を隔離してコントロールされるべき側へと劣等化する論理の内部にこそ、奴隷制とその余波の人種差別を隠蔽する場所があることに眼を向けるとき、戦争と暴力の非合理こそがモリソンにおいてBlacknessが書き込まれる場所であることが確認されているのである。トイレの水に映った自分の姿でBlacknessを確認するシャドラックのジェスチャーは、近代論理が歴史のディスクール化の過程でいつも既に「不在(absence)」にする「人種」のカテゴリーに存在(presence)確認の場を与える作業なのである。「進歩」を線的時間性において一元的に描出する近代物語がいかにBlacknessの場を隠蔽するのか、支配的ディスクールが現実レベルの矛盾を「外側」の暴力として体験させ、内側に潜む「人種」という暴力のカテゴリーの場を排除して立ち現れていくのか。戦争は近代の進歩の論理の歴史的必然であることを奴隷制を中心に見据え直すことによって、西欧の進歩という大きな物語の論理内部に立ち現れる暴力の場所を確認する。近代システムに内蔵された「人種」のカテゴリーの気まぐれな偶発的暴力から身を守るために施行された対抗的な場のシステ

ム化にこそ“National Suicide Day”設立の意義がある。

(1-b) 黒人版レディ物語--(W)right家の正しい「近代」の母の位置、核家族的空間、時間

ボトムと名指された黒人コミュニティ崩壊のプロットは、北部都市への「大移住」によって生じた西欧の進歩という大きな物語への参入の歴史的契機が、黒人たちにとって歴史的な方向性喪失の物語となることを暗示しているが、その喪失物語を積極的に支えるのは、(W)right家と皮肉に命名されて、黒人版ブルジョアレディ像を作り上げていくことに人種向上の方向性を求めていく Helene (W)rightである。女郎屋をしていた母の住む南部からできるだけ遠いところに身をおき、礼儀作法と身だしなみの汚れのなさを徹底させる黒人コミュニティのリーダー格としての Helene は、表層の道徳的正しさを追求する方向性において、深層の歴史的な方向性を喪失させていく見本である。 *The Bluest Eye* においても、白人中産階級男性の価値観を内面化して、近代化＝白人化＝ブルジョア化という方向性で認識される混血児モリーンの価値観は「首を失ったかのようなタンポポの茎のように ‘like wild dandelion stem that had somehow lost thier heads’」と表現されて方向性の喪失が批判的となる。近代資本主義システムへの参入の契機は、黒人ブルジョア層増加の絶好の機会到来として把握されるが、その歴史変容は「人種的向上」が「白人的価値を模倣すること」とすり代わり、歴史的ルーツを喪失していく契機ともなる。白人的物差しを適応して黒人内部を差別化し、ペコーラへの優越性を振りかざす混血児モリーン、潔癖症気味のジェラルディン、結婚はするがボーイフレンドは持たないモービル・ガールズ、黒くて醜い自分の娘を愛せないポーリーンなど、黒人女性が白人中産階級の価値を内面化して、家長である男性に守られるべき女性の正しい位置を主張するジェンダー・イデオロギーに飲み込まれていくとき、奴隷制の伝統においてジェンダー役割には無縁の生活形態（野良仕事と家事の両方の役割をこなした）を維持してきた、歴史的、文化的ルーツは忘却されていく。黒人男性が白人並みの経済力と社会的地位を持たない現実が浮上するとき、男性役割を果たさない（果たせない）ことを攻撃して破壊的な言動に出る女たちを描きながら、モリソンは、黒人ブルジョアジーが出現する契機となった近代への参入への歴史プロセスを黒人コミュニティにとっての「見せかけだけの春の日‘false spring day (76, 49)’」と呼び、ファンキネスを喪失する方向へと積極的に係わっていった黒人女性たちの過ちを弾劾する。

近代が提供するかにみえた「人種の向上」の歴史変容の機会を近代化＝白人化＝ブルジョア化と同一視し、白人女性に期待されていた「階級・ジェンダー」のイデオロギーに包摂される女性像、結婚観、母親観に忠実な黒人版の‘respectable lady’を模倣する女性リーダーがネルの母親Heleneと彼女を軸に織りなされる(W)right家の物語である。Heleneが体現する母親像は、白人のコピーとして「階級・ジェンダー」のイデオロギーに縛られていることに加えて、人種的限界も隠蔽した表面的な「自分の権威の正当性‘the legitimacy of her authority (25,30)’」にすぎないことが、ネルを伴ってニューオーリンズまで旅をする汽車の中で露呈する。ボトムを一端離れて白人男性の視線に晒されたときに浮かべたコケティッシュな服従的な笑みは、その場に居合わせた黒人男性の側に「閉ざされた顔と、錠を下ろされたように無表情な眼‘their closed faces, their locked eyes’(28,34)」を誘って、白人車掌(a white conductor)のmale-gazeに真の権威の在処があることを示し、娘のネルに「母に対する憎しみ‘a hatred for her mother’(29,35)」を生み出す源泉となる。しかしながら「階級・ジェンダー」の観点からrespectableで(W)rightに秩序づけられたHeleneの編み出す核家庭空間が表層的には「道徳的正しさ、歴史的方向性の正しさ」の場所として「圧迫感を与えるほど清潔な‘oppressive neatness(38,44)’」雰囲気醸し出していることに気づきながら、ネルの母親に対する批判は、主に‘custard(30,35)’になってしまうという表現に象徴される人種的無力さに向けられている。白人中産階級男性の価値観を模倣するHeleneのような母親性への拒絶から始まったネルの‘me-ness(44)’を探求する旅は、人種差別に社会的無力さを露呈させる黒人男性ジュードの「怒りのはけ口」として役に立つ喜びにすり代わり、喪失した男性性を回復する代償として結婚が決意されるとき、ネルの旅は、夫のため、子供のためには自己犠牲を惜しまない良き妻、良き母親になるというジェンダーと母性愛イデオロギーのマスターコードに絡み取られていく。10年の空白期間を経て再会したネルをスーラは家庭領域を守ることに終始する「彼女らの一員になってしまった‘Now Nel was one of them.’(145,154)」と感ずる。‘me-ness(44)’を探求する試みにおいて共感しあい「スーラにとって本物に見えた最初の人間で、その名を自分が知っていた」ネルがいまや自由意志で落ちるのを恐れる蜘蛛の一匹のように巣を守ることにしか考えない女たちと同じ行動をとって、黒人コミュニティの名づけ方「ネル=good/スーラ=evil」を共有するようになったとき、スーラはネルが体現する「良き母親」像を「二番煎じ‘a second hand lonely’(173,182)」と呼んで批判する。死に際にスー

ラが発した問いは、西欧形而上学的に「善／悪」を二項に振り分けるマスターナラティブの思考の枠組みの外側の空間、時間があるのではないかという疑問をネルに、そして読者に突きつける。

「どうしてわかる？」とスーラがきいた。／「わかるって何が？」ネルはまだ、彼女のほうを見ようとはしない。／「尽くしたのは誰かってことよ。
‘About who was good.’それがあなたのほうだって、どうしてわかる？」／
「それ、どういうこと？」／「ひょっとしたら、それはあんたのほうじゃないかもしれない、ってことよ。ひょっとしたら、わたしのほうかもしれない。」(176,186)

「ネル＝good／スーラ＝evil」と枠づける言語秩序は、シャドラックを「狂気」と名づけ、スーラとシャドラックの二人を“Two Devils”とラベルを貼って他者の側を排除し、我々の側を「正気、正統、善」の位置に置こうとする西欧形而上学的認識の身振りを示す。AかBかという二項に振り分けて名づけていく言語秩序のジェスチャーが「欠如」とする時間、空間は、スーラの死後、ボトムと名づけられた黒人コミュニティの崩壊の後に、近代の線的時間性の認識の枠組みから失われる場所として、ネルの「環を描きつづける哀しみ」に暗示されることになる。その円環的認識を促す場所は、西欧近代の進歩物語が、個を最小の単位として分節化する支配的ディスクールにおいて、「語られざる欠如の場所」として位置づけられてきた「名づけられない子宮空間」の問題性が封印されたはずの「テキストの裂け目」から響き合う声を聞く場でもある。

(1-c)「エヴァー-ハナ-スーラ」の三代にわたるピース家の女たち--問い直される「別の」家族空間--母の声、娘の声

(W)right家の母親Heleneが黒人版のレディとして標準言語に包摂される言語秩序と核家族として区分される境界を‘clean’で‘neat’なものと同様に秩序づける守護者であり、娘のネルも母を拒絶しながらも最終的に核家族的に仕切られた「良き母親」のコードに包摂されるマスターナラティブに取り込まれていくとすれば、ピース家の三代にわたって母から娘へ橋渡しされていく物語において、読者が目にするのは「たえず何かが付く足し続けられる巨大な家(39)」の創造者兼君主であるエヴァによってつむぎだされる「別の空間」であり、功利的合理性や「生産論理」に収斂されえない生き延びのための「再

生産原理」が支配している矛盾の場所である。

マリアヌ・ハーシュは、生き延びの手段として切断されたエヴァの「不在の脚は、テキストの中心の裂けめ、スーラとネルの物語形成の出発点の核になる口にするのも恐ろしいものとして機能する¹⁵」と説明し、「左側の空白の場所」が表象するものは、主体としての母親の不在の場所、語られざる欠如の場所であるとしている。個を最小の単位へと収斂する一元的価値観が支配する西欧のディスクールにおいて、「語られざる欠如の場所」として位置づけられてきたのは「名づけられない子宮空間」「母なる空間」である。象徴秩序参入以前の想像界に位置づけられ、個として成長する前段階、言語以前の「母と子」の共生段階にあって、個が成長していくプロセスにおいて母を踏み台にすることを個体発生の当然の前提条件と規定するディスクールとの関係性において、母親には主体としての発話の場がなく、自己犠牲的沈黙をア prioriに付与されてしまう。そのような空間を、例えば、クリステヴァは、父の名＝法として象徴秩序で示される言語秩序において唾棄されアブジェクトされる「沈黙」の空間として問題化した。とすれば、西欧ディスクールにおける主体的母の発話の位置の問題に「人種」のカテゴリーが付け加わったとき、黒い母の言語と身体性はどのように再構成されて問い直されているのか？

まず着目されるべきは、例えば、クリステヴァが、父の名＝法として象徴秩序で示される言語秩序において唾棄されアブジェクトされる「沈黙」の空間として問題化した場が、モリソン文学では身体性を与えられることによって、少なくとも読者にとって「可視」であり、意味不明であっても「聞こえる」雑音へと変換されていくことである。白い母の理想像とも異なって付与された黒い母の子宮の場所のディレンマは、娘殺しを説明しようとするセスの語りのように合理的なディスクールを持ちえないが、一人前の人間になる以前の場として貶められる「語り得ない場所」に言語を超越した、身体性を語るというジェスチャーが付け加えられることによって、「母親的空間」は「沈黙」へと幽閉される場を、政治的な発話の場へと翻訳しようとする。エヴァのプラム殺しの説明は、個になる以前としての「母と子」の共生段階にある子宮空間の場所を指し示すジェスチャーから紡ぎ出されている。

二人の人間が同時に同じことを話しているときのように、一方の声がもう一人の声より一秒の何分の一か遅れているように聞こえた。

「あの子は(Plum)このわしを(Eva)、本当に苦しめたんだよ。生まれてき

たくはなかったようにさえ見えた。でも、生まれてきた。男の子を生むのは苦しいもんだよ。おまえにはわからないだろうけど、本当のことさ。...それなのに戦争から帰ってきたとき、あの子は元にもどりたくなかったようだった。ただあの子を生んで、あの子を生かしておくだけに、あれほど苦勞してがんばったというのに、あの子はわしの子宮にはい戻りたがっていた。それから、...たとえ彼にはそんなことできたとしても、わしにはあの子を入れてやる余地なんかありやしなかった。わしの子宮のなかには、あの子を入れてやる空間なんてなかったんだよ。それなのに、あの子はい戻ろう、はい戻ろうとするのさ。どうすることもできず、赤ん坊みたいなことを考え、赤ん坊みたいな夢を見、またパンツを濡らして。...(87-88,95)

黒い母の<子宮から響く声>は、いったん象徴秩序に翻訳されるやいなや意味をなさない分裂病患者の雑音にしか響かないが、個へと分節化される以前の「母と子」の共生関係を生き延びる身体の場所と象徴秩序（言語獲得以前）に入る以前のセミオティックの場所¹⁶が示されていく。このような個以前の場所が示されることによって、モリソンが示唆しようするのは、唯我論的に枠づけていく西欧個人主義的ディスクールがアポリアとしてしか示しえない場所なのである。

次に注目したいことは、ハーシュの指摘によって必ずしも明確にならなかった「エヴァの不在の脚」が隠蔽する語るも恐ろしい黒い母親の現実と「エヴァーハナースーラ」と連なる三世代にわたるピース家の家系において、近代物語の中の欠如部分として母の声から娘の声へと橋渡しが出来損なっていく母親性のディスクールとの関連である。「エヴァの不在の脚」は、夫が去ったあとに、三人の乳飲み子を抱えて、食べるものも暖をとるものもない黒い母親の現実における経済的、社会的弱さを覆い隠す空間である。その欠如の場所は、黒人男性であるボーイボーイが果たさない（果たせない）父親役割としての妻子を養う経済的義務の不履行（社会的不能性）を契機に発生し、母に全面的に依存しなければ生きていけない運命共同体的な段階にある複数の子どもたちを生き延びさせる幾重にもわたる重責を背負いこまざるを得なかった母親性の弱さをカバーするために取られた最後の手段の痕跡であり、スーラが自分の指先を切り落とす行為にも似て、暴力の矛先が内向きに行使された結果である。強い夫に経済的、社会的に扶養され保護される妻が子供に対して向ける無私の母性愛を理想の母親のものと定義する階級・ジェンダーの支配的ディスクールは、自分の身体をも犠牲にする黒い母親の内向き

の暴力を合理的に説明する場を持たず、「エヴァの不在の脚」にまつわる物語は子どもたちを楽しませるための「うおのめ」の話などに面白おかしく化けていく。見えていてもみんなが無視する態度を取る「欠如」の場所は、黒い母親にまつわる現実、史実レベルでの矛盾が隠蔽されて、歴史記述がディスクールから「不合理」の場所を消し去り、抑圧していく「空白」の象徴でもある。皮肉なことに、切断された「空白の場所」によっておりた保険金は、エヴァの時代の困難な母親性の記憶を忘却し、理解しないピース家の娘たちの声を生み出す契機となる。

「エヴァの不在の脚」によって、貧困と飢餓から解放された非核家族的なピース家の空間は、近代資本主義経済システム原理から自由な娘たちの振るまいを可能にさせるかに見える実験的な場を生み出す。母親が子どもたちのために自らの身体を傷つけることで生じた欠如の場所によって、経済的な重荷から解放されることになった娘のハナは、人種差別と性差別の複合的要素が黒い母親に襲いかかる現実レベルの「傷つきやすさ‘vulnerabilities’ (47,53)」が収斂する欠如の空間を理解せず、母に向かって“Mamma, did you ever love us?” (90)という母からすれば信じられないような質問をする。

「母さんがわたしたちみんなを養ってくれたことは、わかっているの。わたし、それとは別のことを言っていたの。そのう、そのう。わたしたちと遊んでくれたことがあったかな、というようなこと。母さん、わたしたちといっしょに遊んでくれたことある？」(92,84)

母子ともに飢え死にをしなければならなかったかもしれない1895年の黒い母が抱えた貧困の窮状は、エヴァの不在の脚によって覆い隠され、母親性を体験したコンテクストのギャップが、母と娘の対話をぎこちなくずれさせていく契機となる。

「エヴァの不在の脚」は近代資本主義経済システムにおける現実の黒い母親性の傷つきやすさが、保険金が入るようになった結果、覆い隠されていく欠如の空間であるとすれば、孫娘のスーラが自らの指先を切り落とす行為によって生み出される空白は、現実レベルの弱さ、「黒人であり女であることの限界」を覆い隠し、拒絶しようとする反逆的意志が露呈する空間である。スーラとネルが12歳になる1922年の章は、黒人少女のセクシュアリティが、黒人男性の「値踏みのまなざし‘appraising stares’(62,69)」の対象物として、「いいたま‘pig meat’(62,69)」と名指されて性の対象物に滑り落ちてしまう

かもしれない危うい「綱渡り芸人のような‘like tightrope walkers’(63,70)」位置づけであることを暗示していく。この二重の対象物の位置に付け加えて、人種差別を制度化している社会は、黒人少女のイニシエーションの場をさらに危ういものにする。

新しくやってきたアイルランド人の息子たちで、十代前半の白人の少年が四人、午後ときおり、黒人の学童をいじめて楽しんでいた。…実際、プロテスタントの白人の住民たちが一致団結して行うことのできる唯一の行動は黒人をなぶることだった。新しい入植者たちは、黒人にたいする昔からの住民の態度をそっくりまねる場合にかぎって、新しい環境のなかで多少地歩を固めることができるような気がしたのだ。(65-66,73-74)

人種的差異をmarkedする人種差別社会へのイニシエーション通過儀式は、アイリッシュ系の白人の少年が振るおうとした外向きの暴力（黒人いじめ）の拒絶として、自らの指先を切り落とすという内向きの暴力へと向きを変えて出現する。人種差別に抵抗する女の強い意志は、*Beloved*におけるセスの娘殺し、*Sula*におけるエヴァのプラム殺しとともに、女の暴力が、内向きに反転されて出現する傾向にあることを示している。

人種差別社会への抵抗点として意識的にスーラの指先が切断されたとすれば、チキン・リトルを水死させる通過儀礼は偶然の出来事として、自分を創っていこうとするスーラの物語の中で無意識的に、あるいは、無自覚に「不在」にされていく場所を指し示す。チキン・リトル殺しの引き金となるのは、「育児の面倒さ‘the problems of child rearing’(77)」を口にするハナの世間話を立ち聞きしたことである。この立ち聞きで、「黒人女性版」のBildungsromanを創っていく自己形成物語のもう一つの足枷となる要素を母親性に嗅ぎつけたスーラは、母親性を拒絶する選択をするのである。

川の水が黒くなり、たちまちチキン・リトルが沈んだ場所をふさいだ。…今では、川の間はまったく静かになっている。灼けるような太陽のほかは何もなく、何か新しく失われてしまった‘something newly missing’のだ。(82-83,75)

チキン・リトルが沈んで閉じられた場所、新たに失われた場所とは、「黒人女性版」のBildungsromanを創っていこうとする娘の自己形成物語におい

て、無意識的に、無自覚的に、再び、母の声が発話され損なう場所であり、母の子宮の身体性が拒絶される場である。性はハナにおいては、婚姻関係に女の性を閉じこめて道徳的正しさの場所とする結婚制度をあざ笑うような、男の所属物に還元されない快樂の場所として、スーラにおいては、産む性としての母親性を分離した果てに行き着く孤独を確認する場所へと収斂されていく。

しかしその固まりは破れてばらばらになり、彼女はそれを元に寄せ集めようとしてうろたえ、その端から無音の世界へ飛びおり、ハリケーンのように吹き荒れる歓びのさかに悲しみの中心を見、事物の終わりがきたという突き刺すような意識に大声をあげて泣きわめきながら、降りていくのだった。そこには、その沈黙の中心には、永遠ではなく時間の死があり、あまりにも深いので言葉も意味を失うほどのさびしさがあった。さびしさはほかの人間の不在を想定するが、彼女がその絶望の地に見出した孤独は、ほかの人間の可能性をけっして許さないものだったからだ。(149,158-159)

ここで、産む性としての身体性を排除した結果、自己以外の誰とも結び合えない孤独に「大声をあげて泣きわめく」という性描写は、男性的力の自己確認の場所として描かれるような「ファルス（ロゴス）中心的な‘phallogocentric’」性描写と対極に位置するものであろう。「言葉も意味を失うほどのさびしさ」の究極に示されるのが自己概念自体の空洞化、自我という概念自体を失って溶け出していく場所なのである。

彼女には中心がなく、成長していく上の核となる点もなかった。…彼女には野心がまったくなく、金や財産や事物にたいする愛着も貪欲さも、人の注意をひいたり、お世辞を言ってもらいたい欲望も全然なく--自我がなかった。こういう理由のために、彼女は、自分を確かめたい--自分の本質に徹したい--という強い衝動は感じる事がなかった。彼女がネルに執着したのは、ネルが他人と自分との両方にいちばん近い存在だったからだが、その結果は自分とネルはまったく同じものではないことを発見したにすぎない。(144-145,153)

その場所は、究極的にはチキン・リトル殺しの通過儀礼によって、スーラ自身が封印した母親性の場所であり、いかなる他者とも結び合うことの出来

ないスーラの「自分を創り出す」物語の中心を空虚の場所として問題化する。死を予感するスーラが、「ザ・クラブ・ガール・ベイキング・パウダーの女」が「解けて白いほこりになっていく」のを見て恐ろしい気持ちになり、「粉煙の臭いに圧倒され、さるぐつわをかまされたような気分になって目がさめる(178,189)」という夢が示唆するのは、母親ハナが「燃えているのを見てぞくぞくしていた」態度が象徴するように、スーラが大人の女になるプロセスにおいて封印していった（殺した）母親性の発話の場所である。チキン・リトルの沈んだ水面の閉じた場所も、燃えているハナを救おうとエヴァが飛び降りた封印された窓を、死に際にスーラが五回にわたって見つめるジェスチャーによって示されているのも¹⁷、自分を創る物語を目指すことで閉じられていく母親性拒絶を象徴する場である。母のハナが燃える事件を‘see’ではなく‘watch’して「面白い」と感じるスーラのジェスチャーは、なんとしても救い出そうと窓から飛び出そうとしたエヴァの母親性と対極にあって、生き延びの原理で「母／子」を運命共同体として括る母の発話の場所を閉じていくことに加担する。

しかし、スーラの母親性の拒絶のジェスチャーは人格上の欠点として描かれているというよりは、西欧個人主義的な唯我論的思考法の中で必然的に見失われていく限界点を浮き彫りにさせる戦略の現れであるとみた方がよいであろう。individuationのプロセスを描く Bildungsroman の物語形式が「自己／他者」を分離して、唯我論的に、個人主義的に物語が編み出されていく中心の場所としての identity 概念を前提としているとすれば、そのような identity 概念の脱中心化をはらむ契機は究極的には原他者としての子との共生関係を示す空間を問い直すところにある。それは、西欧個人主義的な individuation のプロセスを描く Bildungsroman の物語形式が前提としているアイデンティティ・ポリティックスによって、隠蔽されてしまう場所である。

(2-a) シャドロックとスーラ--二人の悪魔の場所とコミュニティの崩壊の場所

近代啓蒙の大きな物語に飲み込まれて同化していった黒人コミュニティは、シャドロックとスーラを「二人の悪魔‘Two Devils(142,151)’」と西欧マスターの言語秩序にたって排除し、自らを「正統、善」の側に位置づけようとするが、黒人コミュニティから‘pariahs」とみなされる二人は、孤独さにおいて共通であり、「狂気」とラベルを貼られる位置において支配的ディスクールに取り込まれていった黒人コミュニティとのものの見方の差異性を共有し合

う。シャドラックがカウベルと絞首吏の首吊り縄をもって黒人コミュニティの絆をまとめあげ損なっているのは、彼が狂人であるからというよりも、「正気／狂気」を二項対立的に認識し識別する西欧思考法の罫に黒人コミュニティ自体がはまっていったからである。スーラの眼の上のバラのマークは、読み手に様々な解釈を誘う記号であるが、人々には‘evil, roach, plague, bitch’の烙印としか見えない記号をシャドラックだけは、「オタマジャクシ‘a tadpole’」がある彼の「友達‘a friend’」であり、「彼の愛する魚のマーク‘the mark of the fish, he loved’(199)」を持っていると読みとることができる。

「彼女は-彼に-何かを求めていた。魚でもなく、仕事でもなく、彼だけが与えることのできるものを‘She had wanted something--from him. Not fish, not work, but something only he could give.’(188,199)」。

「ネルの記憶にあるものよりずっと黒味を増していた(115,125)」痣は、ネルも含めた黒人コミュニティの大半が、近代化の線的時間、空間に飲み込まれていく中で、益々紛れもなく示していくスーラの差異性のマークであるが、そのスーラに対して、「シャドラックだけが与えることができる何か‘something’」が、チキン・リトルが沈んだ水面から「新しく失われてしまった何か‘something newly missing’」と呼応しているのは間違いあるまい。エイジャックスとのセックスでもなく¹⁸、強制的異性愛の結婚制度に閉じこめられたネルでもなく、祖母のエヴァと母のハナとの絆からも繋ぎ損なわれて、スーラが死ぬ際に見るもう一つの夢は、「個」が「他者」と結び合う可能性を‘a sleep of water always’を約束するシャドラックの声が響く場所に向かって開いている。Vashti Crutcher Lewisは、「水」「河」「川のほとりにつどわんの歌」の場を、アフリカの宇宙観に根ざす伝統を表象すると説明した。¹⁹スーラの死に際に、薄れゆく記憶の夢という形ではあれ、西欧近代物語の中の「別の時間」「別の空間」が顕在化しているといつてもよいであろう。いつか朽ち果てる肉体を持った一個人の生涯のタイムスパンを超えた永続性の場所が‘a sleep of water always’において約束されているのであり、疲れた肉を慰め、癒す場所が「狂人」シャドラックの声が子守歌のように響く場所である。事実、スーラの死は、「母なる空間」に回帰するかのときイメージで描かれる。

そしてついに雨の匂いにめぐりあい、水が近いことを知るだろう。そして、肌に吸いつくような水のやさしさのなかにすべりこみ、水は彼女を包み、

支え、疲れた肉を洗ってくれるだろう、ずうーっと。ずうーっと。(179,189)

チキン・リトルが沈んでいった水の閉じた場所が、ある種の母親性を拒絶するジェスチャーであったとしても、死への眠りの中でスーラは、いつかは朽ち果てる身体を持ったライフスパンに限定された一個人の母親の子宮の時間性、空間性を超える集合的子宮のイメージとして括り直される場所としての「水」の中に、その疲れた肉体が柔らかく包み込まれていくような感覚を持つ。

しかし、スーラが「ずうーっと」との約束の声の持ち主をどうしても思い出せなかったように、シャドロックがBlacknessを確認する「水」「河」「川のほとりにつどわんの歌」の場は、黒人たちを集団として繋ぎ留め損ない、呼びかけ合う場になり損なう。ボトムsの黒人コミュニティの多くがトンネル工事の場面で水に流されて死ぬプロットは、進歩を梓づける大きな近代物語において、「人種的向上」を目指す試みが未完に終わったことを暗示しているからである。戦争が偶発的に生み落とした空白の場所に開かれた一時的な賃金労働者への雇用の機会は、黒人中産階級層の形成を促進させていく好機となった一方で黒人コミュニティがグループとして人種的な絆をどのように取り結ぶのかという問題の所在を複雑化させる歴史的契機ともなった。「人種の向上」のための絶好の機会を開いたかに見えた空間は、人種差別主義のイデオロギーが継続的に支配していたことを、その後襲った大恐慌が如実に示すことになる。1927年以来、トンネル工事建設に携わるという「若葉のうちに枯れてしまった約束‘the leaf-dead promise’(193,205)」に怒りを爆発させて、彼らは自分たちが建設することを禁じられたトンネルをできるかぎり上手に破壊する。「最後に雇われ、最初に首を切られる」という人種差別主義が近代資本主義経済原理に内包されていた現実として大恐慌とともに露呈し、賃金労働者としての仕事が奪われていくとき、黒人たちに提供するかのように見えた豊かさへの歴史的機会は、一転してディストピアへと暗転する。人種差別主義がトンネル工事に携わる機会を奪ったとき、黒人コミュニティの怒りは、トンネル工事自体を未完に終わらせる方向に向けられ、多くが入り口付近で死ぬ。

大勢の人がそこで死んだ。今では暖かくなってゆるんだ土が動いたのだ。最初の差しやが抜け落ち、トンネルの表面‘the face of the tunnel’からぐらぐらしていた岩が落ち、構盾が崩れた。彼らは自分たちをそこまで連れ

て来てくれた太陽を奪われ、水攻めの部屋‘in a chamber of water’に入っていることがわかった。最初の割れ目ができ、そこからしゅーっと水が入ってきたとき‘With the first crack and whoosh of water’、よじ登って外へ出ようとする争いがあまりにすさまじかったので、みんなを何とか助けようとした人々まで引きずり落とされて、死んだ。鉄の横梁と木材の固まりに押しつけられた少年たちは、酸素が彼らを見棄てて水と合流したとき、窒息して死んだ。(194,205-206)

ここで、この出来事に表出するトンネル空間自体が子宮空間のようにイメージされていることに留意したい。黒人たちは、まるで集団的に流産したかのように再生に失敗する。「進歩」という線的時間性への参入に見えた歴史性は、リーダーを欠いて方向性を失い、「ひたすら愚かな示威行進‘this headless display’(198,204)」が示されるまま集団的自己破壊に向かう。Diane Gillespie and Missy Dehn Kubitschekは、このトンネルの「子宮」的なイメージとプラムが欲望する「子宮空間」への回帰を類似のジェスチャーとして説明する。

プラムが完全な依存状態が保証してくれる安全な場所へ戻りたがったように、閉じこめられた怒りが和らぐことを期待して、「子宮のようなトンネル」へとはい戻っていかうとして、町の人たちは窒息する。²⁰

(2-b) 線的時間と円環時間--「自己／他者」の未分化空間としての母なる空間

このトンネル場面が子宮空間のごとくイメージされているのは、トンネル自体が外枠物語において「近代」と名づけられる線的時間性において、いつも「一人前の人間」になる以前の場所として位置づけられる「名づけられない空間」の問題性を浮上させる母なる空間のメタファーとして機能しているからである。資本主義経済の生産原理の場でのシステム化された人種差別にプライドを傷つけられ、精神的外傷を負って、はぐくみ育てる必要のある子どもたちを捨てて逃げ出してしまっ行って行方不明であったり、戦争でのシェルショックなどから廃人ようになって帰還し、もう一度母への依存を必要とする子供に逆戻りしてしまう存在感の薄い男たちの代償として、エヴァ・ピースの非核家族的家空間で創り出されていった生き延びの再生産原理の場所があるのだが、生き延びの再生産原理によって滋養される‘the Deweys’も、ター

ル・ベイベーもプラムもindividuationのプロセスを経た後の個として一人前の大人になるディスクールの場を持たない。西欧の個人主義に基づいて、分割され終わってしまっている個としての母の子宮空間はいつも既に傷つきやすさを完了した後の時間性として立ち現れ、個として母の子宮空間をアブジェクトする時間性はミクロのレベルではアイデンティティ・ポリティックスに取り込まれて個になりきれない人間を「退行」として位置づけ、マクロのレベルでの近代「進歩」物語に包摂されてしまうからである。「進歩」と名指される歴史の内部に書き込まれた黒人コミュニティの歴史変容の場所は、新たな差別が再生産されていく空間に向かって開かれており、プラムの母の子宮へ回帰する欲求が「退行」として否定的に書き込まれるように「進歩」の時間性で示される価値観からは、後退として否定的価値しか持たない。ネルの結婚がジュードの男性性喪失体験の代償としてあったように、「一人前の人間」に成りきれない息子のぐちっぽい泣き言の代償として母の子宮は「退行」の場として刻まれてしまう。

子宮的空間イメージとして立ち現れるトンネルの入り口で黒人コミュニティの大半が崩壊した1941年のエピソードの後も、近代が母的空間をどのように位置づけるのかという問題は、引き続き未解決のままであることが、「1965」と題されたエピローグ的な章で明らかになる。近代が便利さの一貫として「老人ホームの次々の建設」を押し進めた結果、エヴァは、名札で仕切られた老人ホームの個室に押し込められて幽閉される。

ロビーは豪華で--近代的だった--が、彼女がのぞいた部屋は、貧弱な緑の鳥かごのようだった。...廊下に沿った三番目のドアには、エヴァ・ピースと読める小さな名札がかかっている。(200,212)

モダンな造りの贅沢な建物であれば、昔、エヴァが自分の脚を切断してまで「生き延びる」手段を囚らなければならなかった貧困の極地とは無縁であろうが、個別に貼られた「名札」から観察される部屋はモダンであっても「檻」と名づけられる。「個別の家々」はエヴァが継ぎ足していった奇妙な造りの家と対極にあるし、この「名札」は、複雑な造りの家に誰かれ構わず面倒を見たエヴァが、三人の浮浪児をまとめて‘the Dewyes’と区別なく名づけた行為とも対極にあって、近代化の浸透が黒人コミュニティにおいても、西欧個人主義の徹底、核家族化の普及という方向性で進歩が位置づいていくことが容易に想像できる。

しかし、この象徴的描写でモリソンが明示していることは、進歩の近代物語の中で黒人コミュニティが喪失したものである。

女たちがお互いに、仕事と育児を共有せねばならぬということを意味した「立ち寄ること」に代わって、いまあるのは、テクノロジーによって互いに結びつけられ、またより広い世界に結びつけられている「個別の家々」である。電話は世間話を容易にするかもしれないが、女たちが家事の労苦を共有する可能性を否定してしまう。²¹

個別のテレビと個別の電話が備わった個別の家々がモダン核家族化を浸透させていくにしても、その便利さと引き替えに喪失したものは、以前にはあったはずの「日常生活の絆」であり、母と娘の物語が何世代にもわたって継承してきたはずの歴史的、文化的ルーツによって結び合う場である。「良き母」の具現者として老人ホームの個別化された部屋を慈善訪問するネルが、「悪、魔女、世間からつまはじきされるもの‘pariah’」の具現として正反対の位置づけにあったはずのスーラと差異はないことを見抜くのは、個を最小単位とし、育む責任と義務が生じる最小単位を核家族として仕切るディスクールが規定する良き母親とは別の種類の母親性を生き抜いた（種の生き延びを第一原則とするような）エヴァである。エヴァに批判されて、ネルは「わたしたちは、仲のよい友だちだった‘We (Sula/Nel) was girls together’ (209, 221)」こと、「大人の黒人女」の物語が「欠如」を余儀なくさせる子宮の場所に思いを馳せるのである。

チキン・リトル殺しとともに「閉じられた水面の場所‘the closed place in the water’ (75, 82)」は、ある種の母親性の発話の場所を葬りさる通過儀式を指し示すという点で、スーラとネルの間に共犯関係が生まれる契機となる転換点である。インタビューで‘see’と‘watch’の違いを説明しながら、モリソンは、エヴァが「スーラ／ネル」とは異なるパースペクティブで見ていることを指摘する。

Eva is a triumphant figure, one-legged or not. She’s playing God....But she says all of the important things. She tells Nel, for example, that there is no difference between her and Sula. She tells her, ‘I just saw it. I didn’t watch it.’ Now, ‘watch’ is something different from ‘saw.’ You have to be participating in something that you are watching. If you just

saw it, you just happened to be there.²²

「スーラ／ネル」の娘の世代には理解され損なうが、モリソンが作り出したエヴァは「近代」に取り込まれた娘の世代には忘却されていく「重要なこと」を言う母なのである。母親のハナが燃えるのを「面白い‘interested’(95,104)」と感じ‘watch’していたスーラとチキン・リトルが沈む水面を「快感‘the good feeling’(205,215)」をもって‘watch’していたネルは、エヴァの世代に母親性の要であったことを拒絶する通過儀礼を取り結んだ点で共犯関係に見える。その要に、ハナが燃える場面を黙って‘watch’していられずに「怪我をして血を流しながら、焔に包まれて踊っている人影めがけて自分のからだを投げ出そうとして、虚空をつかむ(93,101)」エヴァの姿があり、その延長線上に個を区分する名付けを無視して三人まとめて‘the Dewyes’と呼んで責任を引き受ける母がいる。西欧の唯我論的哲学では発話されない「自己／他者」の共生関係の子宮空間を潜在的にせよ、顕在的にせよ差し向けていき問題化させる場所としての母親性に対して、スーラのように他者を排除して自己を創っていく物語を選択するにせよ、ネルのように自己を犠牲にして他者のために生きていく物語を選択するにせよ、AかBかの二者択一的な論理に収斂していく成人の女の物語の中で消えていってしまうのは、「自己／他者」の分節化が進んでいない空間なのである。とすれば、スーラのチキン・リトル殺しにおいて、ネルが取り結んだ共犯関係とエヴァに見えるものとは、AかBかの二者択一的を強いる唯我論的な論理に格め取られていくことで、そのような論理に収斂されえない種類の母の場所を殺すことに加担するというジェスチャーにある。発話の最小単位を個として分節化する西欧的ディスクールにおいて、「自己／他者」の共生関係が個になる以前に存在する場としての母親性はそのような身振りにあっては発話されない空間である。西欧的ディスクールの物語形式が「自己／他者」の共生空間を排除して、「個」が象徴秩序と取り結ぶ「自己形成」の場所はいつも既に母なる空間をアブジェクトしたあとの場所として起ち現れる。

AかBかの二者択一的な論理に収斂されていく「スーラ／ネル」の娘の声は、「善＝ネルの位置」を選択して、figurative deathの位置を取ろうが、「悪＝Sulaの位置」を選択して、literal deathの結末を迎えようが、どちらのプロットも西欧的な枠組みに絡め取られてdead endのアポリアへと入り込む。双方のプロットから、再度、かき消され、不可視になっていくのは、実は、家父長制と人種のイデオロギー言説に支配されて、幾重にも矛盾する定義の場所

しか与えられなかったエヴァのような「黒い母」が生き抜いた現実的歴史的矛盾の場所である。合理性、理性、一元的価値に収斂させていく個の論理しかもたないディスクールの場所は、一端発話されるやいなや、母の声を、意味不明の分裂患者の病理と暴力が露呈する場所へと貶める。プラム殺しを説明する合理的ディスクールを持たない矛盾する現実を生き抜いた黒い母の自己分裂的声は、言語秩序（個の論理）が消し去ってしまっている「母と子」の「名指しえぬ」共生空間の言語以前の場所から発せられていて、通常、沈黙、不可視の位置しか与えられていない黒い母親の現実的な矛盾の場所が、ディスクールに投影され、顕在化されている。

二人に差はないとするエヴァの見え方は、娘の声の場所が忘却しているディスクールの外側からその「欠如」の空間に差し向けられている。核家族の標準化を一元的に進歩の歴史と呼び、個人、核家族を最小単位として境界をつけていった時間性での母親物語（「スーラ／ネル」の娘の世代の母親性）に対して、エヴァの世代の母親性は、個、核家族を最小単位として区切らなかつた先祖の時代へと歴史的文化的ルーツを遡るプロセスで確認されるような円環的時間認識を促す。²³

「エヴァーハナースーラ」の三代にわたる女たちの物語は、歴史が刻み損なつた言語秩序の外側の場所に差し向けられていく。

メダリオンの黒人のならわしにしたがって結婚による姓の変更を無視していたので、それぞれの平たい石には一語しか彫られていなかった。いっしょにすると、それらの墓碑銘は詠唱歌のような感じがする。ピース1895年-1921年。ピース1890年-1923年。ピース1910年-1940年。ピース1892年-1959年。それらは死者ではなかつた。言葉だつた。いや、言葉でさえない。あまたの願いであり、憧れだつた。 (205, 216)

言語でさえない祈りの場所は、“O Lord, Sula,” she cried, “girl, girl, girlgirlgirl.” とのネルの言葉にならない号泣が「ただいつまでも環を描きつづける哀しみ (210, 221)」を響かせている。そして、この物語が個を刻む線的时间によって閉じているのではなく、複数の言葉にならない哀しみや祈りの声を呼応させる円環的な時間に向かって開いていく構造を持つことを読者に認識させる。黒人コミュニティが集団としてどのように再生していくかという問いに対する答えは、近代の合理性と相いれない定義づけを与えられている抑圧された母親性が包含する問題性を問い直すことなしには、見出せない

のである。

* 本稿は、名古屋大学で開催されたアメリカ文学会中部支部9月例会(1998年9月19日)で口頭発表した論旨をもとに加筆・修正したものである。

(注)

1. ジュリア・クリステヴァ、『女の時間』(東京：劉草書房、1991) 棚沢直子、天野千穂子編訳、pp.119-120.
2. Barbara Hill Rigney, *The Voices of Toni Morrison* (Columbus: Ohio State University Press), p.76.
3. 北部「大移住」と歴史変容の物語背景については、樋口映美、『アメリカ黒人と北部産業--戦間期における人種意識の形成』(東京：彩流社、1997)、ジャクリーン・ジョーンズ、『愛と哀--アメリカ黒人女性労働史』(東京：学芸書林、1997)、風呂本・高見・寺山訳、ロナルド・タカキ、『多文化社会アメリカの歴史--別の鏡に映して』(東京：明石書店、1995)、富田虎男監訳、Susan Willis, "Eruptions of Funk: Historicising Toni Morrison," in *Toni Morrison: Critical Perspectives Past and Present* (New York, Amistad, 1993), ed. Henry Louis Gates, Jr. and K. A. Appiah, pp. 308-329.などを参照。
4. Rigney, p. 38. その他にも、Maureen T. Reddyは、"The Triple Plot and Center of *Sula*", in *Black American Literature Forum*, vol.22, no. 1(Spring, 1988)において「*Sula/Nel*」の関係性、Shadrack、コミュニティの三重のプロットから構成されると読んでいる。
5. Marianne Hirsch, *The Mother/Daughter Plot: Narrative, Psychoanalysis, Feminism* (Indiana U. P., 1989). 邦訳、寺沢みずほ『母と娘の物語』(東京：紀伊国屋書店、1992), pp. 344-363.
6. Barbara Smith, "Toward a Black Feminist Criticism," in *The New Feminist Criticism* (New York: Pantheon Books, 1985), ed. Elaine Showalter, pp. 168-185.
7. Elizabeth Abel, "(E)merging Identities: The Dynamics of Female Friendship in Contemporary Fiction by Women," in *Signs*, vol. 6, no. 3, (1981), pp. 413-435.
8. Mae Gwendolyn Henderson, "Speaking in Tongues: Dialogics, Dialectics, and the Black Woman Writer's Literary Tradition," in *Changing Our Own Words: Essays on Criticism, Theory, and Writing by Black Women*. (New Brunswick: Rutgers U. P., 1989), ed. Cheryl A. Wall p.24. ヘンダーソンは、Sherley Anne William's *Dessa Rose* and Toni Morrison's *Sula* are novels that emphasize respectively the *intercultural/racial* and *intracultural/racial* sites from which black women speak, as well as the signs under which they speak in both these milieus.と説明している。
9. 精神分析的読みとして、Alisha R. Coleman, "One and One Make One: A Metacritical and Psychoanalytic Reading of Friendship in Toni Morrison's *Sula*," in *CLA Journal*, vol. 37, no. 2, (1993); Diane Gillespie and Missy Dehn Kubitschek, "Who Cares?"

Women-Centered Psychology in *Sula*,” in *Toni Morrison’s Fiction: Contemporary Criticism*, ed. David L. Middleton, (New York and London: Garland Publishing, Inc., 1997), pp. 61-91. など参照。

10. クリステヴァ、p. 121.

11. Toni Morrison, *Sula* (A Signet Book, 1993), 邦訳、大社淑子『スーラ』(東京：早川書房、1995) p. 12, p.14. 以下、テキストからの引用はこの版によって、邦訳、原文の順に本文中に記す。

12. Patricia Hunt, “War and Peace: Transfigured Categories and the Politics of *Sula*”, in *African American Review*, vol.27, no. 3(1993), p. 445.

13. 参照、Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (Verso: London, 1983)

14. Toni Morrison, *The Bluest Eye* (Picador, 1970, reprinted 1994), p. 56. 邦訳、大社淑子、『青い眼がほしい』(東京：早川書房、1994), p.86. 以下、テキストからの引用はこの版によって、邦訳、原文の順に本文中に記す。

15. Hirsch, p. 176.

16. Rigneyは、“The semiotic may be equated with the instinctual desire for the mother, the unconscious wish to enter the *chora* which is the maternal space,” と説明している。(pp.15-16.) (イタリックス、原文)

17. 「死ぬ間際のスーラが繰り返し見つめようとする(ハナを救おうとしたエヴァが飛び降りた) 封印された窓」の描写箇所を挙げておくと(1) <p.178,l.2> ‘the boarded-up window Eva had jumped out of.’(2) <p.178,l.20> ‘looked at the boarded-up window,’(3) <p. 184,l.1> , ‘Sula looked toward the boarded-up window again.’(4) <p.184,l.11> , ‘the boarded window,’(5) <p.189,l.4,> ‘If she turned her head, she would not be able to see the boarded-up window Eva jumped out of.’この反復的に浮上する無意識的場所こそ、「自分を創る」娘の物語の中で失われていく母の声の場所である。

18. スーラは、運転免許証に記載された名前によって、Ajaxの名前すら知らなかったことに気づき、「首をなくした人形のように感じる‘When I was a little girl the heads of my paper dolls came off,...I did not hold my head stiff enough when I met him and so I lost it(my head) just like the dolls.’(174)」Karen F. Steinは、名づけが権威に係わるものであることを分析している。[“‘I Didn’t Even Know His Name’: Names and Naming in Toni Morrison’s *Sula*.” *Names* 28, 3 (1989), pp. 226-229.]

19. Vashti Crutcher Lewis, “African Tradition in Toni Morrison’s *Sula*,” in *Phylon*, vol. XLVIII, no. 1,(1987), pp. 91-97.

20. Diane Gillespie and Missy Dehn Kubitschek, p. 87.

21. Susan Willis, “Black Women Writers: Taking a Critical Perspective,” in *Making a Difference: Feminist Literary Criticism* (London and New York: Methuen, 1985), ed. Gayle Greene and Coppelia Kahn, p. 214.

22. *Conversations with Toni Morrison* (Jackson: U. P. of Mississippi, 1994), ed. Danille Taylor-Guthrie, p. 64.

23. Thoman LeClairとのインタビューの中でモリソンは次のように答えている。I start with the childhood of a person in all the books; but in the first two, the movement, the rhythm, is circular, although the circles are broken. If you go back to the beginnings, you get pushed along toward the end. This is particularly so with *The Bluest Eye*. *Sula* is more spiral than circular. (Danille Taylor-Guthrie, p.124.)